平成25年(2013)
阿づまの光
6月号・Junio

五代教主作　灰釉茶盌　銘「純世姫」「金龍海五大州茶盌」
六盌のうちの一盌（金龍海大八洲 土・金龍海大八洲松釉）

題字出口直日
通巻第531号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL（IP） 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

四方の国もらさずおとさず御救ひの
教の道に入らしめ給へ

出口王仁三郎聖師

今後の関東教区での宣教活動

関東教区特派宣伝使　大久保　良

関東教区の信徒の皆さまには、日々ご神業・ご生業にご精励のことと存じます。

さて先日のことですが、浅田秋彦東京宣教センター長よりお話があり、東京宣教センターとして、また関東教区特派宣伝使としての宣教活動について、浅田センター長、森良秀東京宣教センター次長（愛善宣教課長兼務）、成尾義愛善宣教課主幹と小職の四人で協議の場が持たれました。

簡単にその結果を申しあげますと、東京宣教センターは直接に首都圏の愛善宣教活動を実施すること（来苑者への宣教活動、大本公開講座、常設講座等）、また、直属信徒（本部並びに東京）、首都圏在住の地方機関所属信徒の教化育成に取り組むこと（センター主催の各種研修会を開催等）が主たる任務であり、特派宣伝使は各主会の分所・支部の活性化に向けて教化育成すること（各地での生きがい講座、教本講習会、研修会を開催など）、また信徒一人ひとりがみ教えの実践リーダーとなれるよう、分所・支部長・役員・宣伝使等を指導することが主たる任務であるとの相互の役割の確認と業務の仕分けが行われました。

要するに、東京宣教センターと特派宣伝使の役割の線引きが必要であるとのことです、

もちろん、月次祭講話などに東京宣教センター職員を指定される場合や、特派に指定があっても、用務が重なって出向できない場合は、この限りではございません。

東京宣教センターは、各主会及び特派と連携し、支援してまいりますとのことです。

右協議の結果は、他教区では当然行われていることであり、私自身もこれまで実践してきたことなので、大変喜ばしく、少しずつですが、大神さま・教主さまの御心にかなった、東京宣教センターや関東教区のあり方へと近づいていると感じております。

今後、関東教区の信徒の皆さまには、既述の東京宣教センター、また、関東教区特派宣伝使の役割をよくご理解いただき、教区や各主会の教勢発展のため、ご用命いただければ有り難く存じます。

第120回大本公開講座「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」

救世のプログラム
―世の立替え立直し―

講師 森 良秀（もり よしひで）
（東京宣教センター次長）

二人の教祖

大本の特徴の一つとして、一つの教団で二人の教祖をもっています。開祖出口なおと、その娘婿である聖師出口王仁三郎です。二人はそれぞれに働き、役目、役割が違います。

開祖なおは、家族でいうところの父親の役割を担い、教義的には厳魂（いずのみたま）と申し上げ、経綸の預言者であり遂行者です。

経綸とは、私たちの住んでいる現界、そして死んでから行く霊界（天界と幽界）、この三界の各境域を治め整えていく方策、仕組みを示したものです。

この三界の経綸の中身が大本開祖によって初めて明らかになったのです。

開祖に神懸かりされた国常立尊は〝われよし強いもの勝ち〟〝物質万能〟の乱れきった世の中を立替えて、貧富の差の少ない、戦争や病気、天災のない地上天国に立直すと宣言されます。

そして生きとし生ける全てのものを救うことが神さまのご慈悲であり、その役割が聖師王仁三郎で瑞魂（みずのみたま）と申し上げます。開祖の父神の働きに対して、聖師は母神の役目を担い救世の使命を遂行されました。

王仁三郎の半生と大本入り

聖師王仁三郎は京都府亀岡市曽我部町穴太で生まれ、幼名を上田喜三郎と申しました。上田家は元来名家でしたが、祖父の博打好きによって家は没落し、王仁三郎が生まれるころには、田畑を地主から借りて耕作する貧しい小作農家になっていました。そのため自身も奉公に出るなど、幼少期から苦労が絶えませんでした。

しかし王仁三郎は、この時期の苦労を神さまのご恩寵であり、自分の将来にとって有難いことであったと感謝しています。

明治三十一年、満二十六歳の時に、神命によって地元の霊山・高熊山で一週間の修行を行います。このことが王仁三郎の生涯の大きな転機となり、宗教者としての強い気持ちが開眼。救世の大使命を自覚することになりました。

高熊山の修行は一時間神界の修行をさせられると、現界は二時間の比例で修行をさせられました。しかし二時間の現界の修行より、一時間の神界の修行のほうが数十倍も苦しかったと『霊界物語』に記しています。

季節は旧の二月、大変寒い時期に襦袢一枚で固い岩盤の上に座布団もなく、その上一週間一滴の水も飲むことも許されません。目の前の木の葉の滴を、自由に舐めることすらできないのです。そのような中にあって、水のご恩、食べ物のご恩というものを徹底的に悟っていきます。

さらに一週間誰にも会わないので、無性に寂しくなってきます。『たとえ虎狼でもかまわない。生ある動物であったらその姿なりと一眼見たい』と憧れる思いにまで達しました。こうして、生物など万有に対する慈悲心が発芽して、ついに人類愛善、万教同根の宗教的活動として昇華していきました。

高熊山修行のあと、王仁三郎に〝西北さしていけ〟との神命が下ります。亀岡市から西北の方とは、なおのいる綾部市がある方角です。

この邂逅により、出口なおと王仁三郎が力を合わせて、大本の神業を世に広めていくことになります。

なおは筆先を通して〝どのようにしてこの世の中を良くしていくか〟という道筋を明らかにしました。一方王仁三郎は、その経綸を遂行していく上で、すべての生きとし生けるものを救い引き上げる救世神の働きを行います。

しかし、大本入りして十年の間は、王仁三郎を数々の苦労が待ち受けていました。当時の幹部はほとんどがなお寄りで、突然現れた王仁三郎は邪魔者扱いで、幾たびも妨害に遭います。

翌明治三十三年には開祖の末子すみと結婚し、長女も生まれますが、王仁三郎に対する排斥はなかなか収まりません。たまりかねた聖師は、しばらく大本を離れます。そして京都市内で神官の勉強をし、引き続いていろんな教団・教派をまわり、実地研修をしました。

王仁三郎が離れた綾部は、火が消えた如くに淋しくなったと史実に記されています。

大正五年を迎えた年、開祖が朝夕にお礼拝をし、ご祈念していた〈みろくの神さま〉が、実は王仁三郎を守護する神霊であったことが判明。開祖も王仁三郎の本霊・神格を了解されるのです。

そこでようやく幹部や信徒も王仁三郎に対する考えを改め、王仁三郎の思いが教えや組織の中で活かされるようになり、その存在が強くなっていきました。

そして大正六年、世に大本の教えを広めるための機関誌「神霊界」が発刊されます。そこには、王仁三郎が開祖のお筆先に漢字を当てて読みやすくした『大本神論』を掲載しました。

『霊界物語』の発表

王仁三郎は妨害、排斥運動が止んだから自身の教説を発表する、ということを控えました。その前に、まず開祖の教えを世に出したのです。人智を超えた王仁三郎の内実を思わずにはおれません。

大正十年二月十二日、第一次大本事件が勃発します。王仁三郎は拘束され、百六十日後に未決監より保釈されます。

それからしばらくした同年十月、昇天した開祖が聖師の夢枕に立ち、〝高熊山で見聞した霊界の消息を早く開示せよ〟と指示がくだります。

これを受けて同月十八日から、事件による大本神殿が当局によって壊される破壊音を聞きながら『霊界物語』の口述が始まりました。

口述とは王仁三郎が語った言葉を筆録者が筆記していくもので、三日に一冊が仕上がる早さでした。一巻が三五〇から三八〇頁程あり、にわかに信じられないペースで進められたことがわかります。大正十五年には七十二巻までできあがり、最終的に全八十一巻八十三冊まで口述します。

物語の中には、現界、天界、幽界の消息が記されています。また、過去・現在・未来の時間空間を超えた、世界中の様々な地域や言語も出てきます。熱帯地方の話になると真冬でも「暑い暑い」と汗をかきながら口述していたという逸話もあります。王仁三郎の肉体はそこに横臥していても、神霊は霊界や現界の世界を巡っていたのです。

この『霊界物語』が発表されたことによって、教団は大きく変わっていきます。

なぜなら、それまでの大本の教えはお筆先のみで、当時の幹部でもその解釈を誤解し、真意を理解していない部分がたくさんありました。

例えば『日本は神国であるぞよ、外国は獣の国であるぞよ』のご教示を字面だけ読むと、外国は野蛮な国で日本ほど結構な国はないという、排他的で間違った国粋主義的思想となります。そのような思想に大本の教義も混乱し、また国家当局の誤解を招き、弾圧を受けることにつながりました。

しかし、『霊界物語』の発表は信徒をして偏狭な思想の理解から、「人類愛善」「万教同根」という普遍的な教えへと進歩向上していきました。そこには、世界主義・国際主義・インターナショナル的な面と、日本の民族的な伝統文化や国風などのナショナリティーの面を大事にする国粋主義、この両面を打ち出していきます。

ここでいう国粋主義とは、決して偏狭なものではなく、私たち一人ひとりの顔や姿形がすべて違うように、それぞれの国は働き、使命が違うということを説いています。これらは大本の教えの根幹に位置づけられるものです。

さらに信徒は霊界物語の拝読を通して、天国を自分自身の心の中に築かなければいけないことや、信仰の力によって身魂磨きをして、内面を深めていかなければいけないことが教化されていきました。

このことは大本信仰の基本的な考えとして確立しました。

世界に広がる大本の教え

その後、王仁三郎はその国際主義、世界主義を具現化していくために、様々なことに取組み始めます。

一つは、大正十二年に世界共通語エスペラントを大本に採用。その二年後には人類愛善会欧州本部を設置し、職員を派遣しました。現地では、エスペラント機関紙『大本インテルナティーア』を毎月発行して文書宣伝活動を展開して、ヨーロッパの多くのエスペランチストが大本の主義精神や活動に賛同しました。

大正十四年から昭和に入っていく過程の中で、世界は大戦へと向かっていました。その中で王仁三郎は、北京で世界宗教連合会を発会します。中国だけでなく朝鮮やベトナム、ドイツ、ブルガリアといった国々から民族宗教のリーダーが集まります。

今日でこそ世界の各宗教が話し合いの場を持ったり、共同の祭典を執り行ったりすることは珍しいことではありませんが、当時は誰も考えられないことでした。

第一次世界大戦の悲惨な状況を見せられた世界の人々は、お互いに仲良くしてもっと協力し合わなければならない。そのためには宗教の和合が大事だという思いを持つようになりました。宗教や民族、そして国家の垣根を取り払ってお互い手を携えていこうという考えです。

当時の大本は、人類愛善・万教同根を提唱し平和主義、国際主義を全面に打ち出しながら、勢いすごく国内外に広がっていきました。

その動きに対して、国家神道を掲げる国家権力は、大本の再弾圧を水面下で進めていました。

昭和十年十二月八日、第二次大本事件が起こります。裁判所の結審が出る前から、教団の建物は次々と壊され、境内地は破格の安価で売却されていきました。

第一審で王仁三郎は、治安維持法違反、不敬罪、新聞紙法違反等の罪状で無期懲役の判決が下りました。第二審は裁判長が宗教に造詣の深い方で、王仁三郎との答弁もツボにはまるようになり、裁判長との問答も真剣味を増して、ぐんぐん内容が深まっていきました。

その結果、「大本の根本目的である〝みろく神政成就〟は公訴事実で言う〝不逞な意義目的〟を持つものでない。〝国体変革の意図あり〟」とする証拠は、一点もないことを明らかにした上で大本の宇宙観、神霊観、人生観など教理が整然としている」と法廷にて明確に示されました。

そして、治安維持法は無罪となります。不敬罪で五年の刑が下りますが、六年八ヵ月未決監に入っていたため、すぐに保釈の手続きが取られました。

さらに、王仁三郎はこの裁判における賠償権を一切放棄しました。『日本は敗戦を迎えて国民は大変な苦しみの中にいる、その国民の血税からもらって、賠償してもらう気持ちは毛頭ない』と宣言し、大本は自主再建の道を選びます。

使命を果たせる世の中に

終戦後の昭和二十年暮れに、朝日新聞の記者が今後の世界について尋ねたのに対して、このように答えています。

『本当の世界平和は、全世界の軍備が撤廃したときに初めて実現され、今その時代が近づきつつある』

昭和二十年十二月八日大本事件解決奉告祭がおこなわれて、新生大本はここに「愛善苑」として再出発します。愛善苑の「苑」を国構えの「園」にされなかったのは、囲い、垣根をなくして、「あなたも愛善」「わたしも愛善」、みんなが仲良くなっていかなければいけないとの王仁三郎の深い意図がこめられています。

王仁三郎は、救世の預言者として『霊界物語』を著し、人群万類の生あるすべてのものがそれぞれ神さまからいただいた生命を全うできる、そして使命を果たせる世界、「みろくの世」「人類愛善世界」を建設することに生涯をかけられました。

企業繁栄祈願祭

今年で第三十一回目を迎えた企業繁栄祈願祭は、四月二十一日に執り行われ、全国各地から八十七人が参拝した。

斎主によって申込企業名が奏上され、弥栄と繁栄を祈願した

祭典は、祓式行事に続いて斎主が大神さまに「企業繁栄祈願大神奏上祝詞」を奏上。続いて一同で「天津祝詞」を奏上した。

次いで斎主が市杵島姫命さまに「企業繁栄祈願祭祝詞」を奏上し、全国から申し込まれた百九十一社の企業や団体の名前が読みあげられ、世界経済の発展と繁栄を祈願した。

勤続44年の中で指針とした人生訓を紹介された多田先生

続いて参拝者全員が玉串をお供えし、讃美歌を斉唱して祭典を終えた。

祭典後、東光経友会を代表して浅田秋彦同会幹事長があいさつをのべ、続いて多田博是大成建設株式会社副社長が記念講演を行った。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は五月十二日、午前十時三十分から、教主さまご臨席、斎主・和田桂一祭務課長のもと執行され、三百四十人が参拝した。

斎主の和田祭務課長（下段中央）と祭員ご奉仕の埼玉主会の皆さん

祭員は埼玉主会、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は旗手彬人神奈川主会長、添釜は東京主会玉松分所の信徒らが担当した。

祭典後、東京本部を代表して浅田秋彦東京宣教センター長があいさつにたち、去る五月四日に教主生誕祭が執行されたことに触れ、本年七月十五日に教主さまが五十六歳七ヵ月をお迎えになることを紹介。また東京・鎌倉での作品展やNHKの番組を通じて大本の知名度が高まったことを引用し「親切の限りを尽くして、聖地までご案内させていただきましょう」と述べた。

１９９８年に結成された東京主会のコーラスグループ「あづま」の皆さん

続いて「美からの門戸を開くために（芸術活動）」をテーマに、浅田センター長が講話を行い、海外芸術展から宗際化活動につながるご神業について説いた。

次いで奉納行事が行われ、東京主会のコーラスグループ〝あづま〟の皆さんが愛善歌「瑞声（La voĉo de Mizu）」をエスペラント混声四部合唱で奉納した。

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第百二十三回大本公開講座『出口なお・王仁三郎の世界を語る２０１３』は、五月十五日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において、森良秀東京宣教センター次長を講師に「出口王仁三郎の預言～みろくの世の姿～」と題して開催された。参加者は二十二人（内、一般九人）。

講座では、国祖の神が築こうとされている地上天国〝みろくの世〟について、教典を引用しながら政治・生活・教育などにスポットを当てて解説。「みろくの世が到来するためには、自己の霊魂を研（みが）いて、水晶の身魂に立替えることがまず求められる」と結んだ。

参加者からは「出口王仁三郎の著書などによれば、みろくの世はなかなか実現が難しく思えるが、比喩的に表現されているからで、みろくの世は既に現在にも見え隠れしているのではないかと思った（四十四歳・男性・一般）」「王仁三郎聖師の言葉（預言）が現代社会に示唆されていることの多さに感銘と共感を覚えました（四十六歳・男性・一般）」などの声が聞かれた。

大本常設対外講座ただいま開催中！

参加費 無料

開催曜日 毎週：月・水・金曜日
昼の部【講話】午後２時～３時３０分
夜の部【実習】午後７時～８時３０分
※ただし、毎月第３水曜日の〝夜の部〟は新橋での「大本公開講座」開催のため休講いたします

場　所 ８階ミーティングルーム（昼の部）、３階ご神前（夜の部）

内　容 ［昼の部］講話：月曜日「人生の目的」
水曜日「人生を豊かに生きるために」
金曜日「あの世を知ってこの世を生きる」
［夜の部］実習：礼拝・鎮魂・修座・浄書（各曜日共通）

東光苑祭典・行事予定

6月

9日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・世界平和祈願祭
市杵島姫命例祭

19日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題 日本及び日本人の使命
～日本は世界の要～
講師 浅田秋彦（東京宣教センター長）
会場 航空会館（港区新橋1－18－1）

7月

14日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭

17日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題 神と人～人は神の子神の宮～
講師 森 良秀（東京宣教センター次長）